

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Linguistic meaning and its role in language data processing

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石綿, 敏雄, ISIWATA, Tosio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000990

言語の意味と言語情報処理

石綿敏雄

A 「意味」を取りあげる理由

この論文ではしばしば言語情報処理 (LDP) ということばが出てくるが、言語情報処理というのは、電子計算機で言語を取り扱うことである。筆者は特にいわゆる自然語 (natural language) の言語情報処理を考えている。このような言語情報処理としては、実用的なものとしていわゆる情報検索 (IR)、それに付随した自動索引づけ、自動抄録、自動内容分析などがあり、また機械翻訳や、プログラム言語、やや進んだ段階の人間と機械の対話コミュニケーションなどが考えられる。この論文ではこのような問題のひとつひとつのもっている特殊な問題を取り扱おうとするのではない。そうではなくて、それらの多くのものの基礎となるもののひとつ——構文分析 (もうすこし小さくして、「ことばの連なり」の意味の分析) について考えようとするものである。したがってこのような分析研究の結果が直ちに実用プログラムにそのままの形で役立つとは考えられないが、将来のやや進んだ段階におけるプログラム作成の際には、その理論的根拠をなすことを目標としている。

電子計算機はそのままでは計算する機械である。機械のなかではデータが二進数として表現され、加算減算され、その延長としての乗算除算が行なわれる。その他、値の大小を比較したり、論理演算を行なったり、データの移動を行なったり、データを捜したり、次に行なう命令を指定したり、計算機の中に外からデータを読みこんだり、計算機の中から外へ数字や文字などで打ち出したりするというようなことができ、かつこれらのことがあらかじめプログラムによつて作成されたプログラムに忠実に従って実行するというような機械であるにすぎない。数字が2進数(ビット)で表わされるのと同様に文字も2進数で示される。文字の連続を人間はことばとして書き、あるいは読

みとるけれども機械は2進表示物として上述のような操作をするだけである。すなわち人間は文字の連続をことばとして読みとるわけであるが、機械は2進数として取り扱うだけであるから、機械がことばの意味を「理解する」ためには、ひとつひとつの文字連続に対応する意味や、それらの文字連続（たとえば語）の連続（たとえば文）の意味について、計算機に教えてやらなければならない。このためには、たとえば単語から文ができるときの、その意味の組み合わせり方の法則についてしらべ、これをはっきりした操作手順（アルゴリズム）の形で示さなければならない。言語情報処理のやゝ進んだ段階を考えてみると注1 どうしてもことばの意味を計算機が「理解」できることが重要であると考えられる（ここで理解の語に「 」を用いたのは、ひゆ的な意味で使用していることを示すためである）。

従来言語情報処理のために種々の構文解析の方法が考えられてきたが、いわゆる ambiguity の解決という点で完全であるとはいえないところがある。そしてその解決のためには、ことばの意味について考えることが必要であると考えられる。注2 この論文で意味のことを取りあげるのはそのためである。

B ことばと意味

ここで意味というのは、その言語形式によって言い表わされるものという程度で定義で考えてゆくことにする。これは言語学でいう意味とかなり近いものであるが、少し違ふ条件もある。言語情報処理においては結局何がいわれているのか、何が指されているのかが問題になることが多い。意味については、基本的な意味と文脈的な意味ということがいわれることがあるが、注3 言語情報処理においてはまず文脈的な意味の確定が必要となるのであろう。

注1 情報検索でいえば、多くの文献があるがたとえば次の文献を参照。民野庄造「EDPによる主題検索の一手法」神戸大学経済経営研究所『データ処理と情報検索』1965所収；鈴木幸雄「外務省における情報検索システム」『HITAC ユーザ研究会第4回大会記念論文集』1967

注2 参照、田町常夫「Phrase Structure Languageの機械翻訳への応用」（昭和42年電気四学会連合大会資料、情報処理学会 Computational Linguistics 研究委員会資料）

注3 佐藤信夫訳ピエールギロー『意味論』（クセジュ）34ページ

ただしそのばあい、基本的な意味の存在を活用する方法があるかもしれない。基本的な意味と文脈的な意味の関係を言語情報処理の中でどのように位置づけるか、これは Computational linguistics の課題の重要なテーマであろうと思われる。じつは言語学の中でも意味のとらえ方にかかなりの開きがあり、意味とは何かについてもいろいろの見解があるようである。ここでは一応上のような態度で取りあげてゆきたい。

ことばの単位、あるいは段階としては単語、文、文章などがあると考えられる。意味にもそれぞれについてもそれぞれがあると考えられる。すなわち単語には単語の意味があり、文には文の意味があり、文章には文章の意味がある。

語から文がくみだてられる一つの段階として、単語の集まりというようなものも考えられる。文を扱うとなると、話手とか陳述とかいろいろの問題が付随してくるので、ここでは必ずしも文までいたらない不定な数の単語の統辞的な連続を考えて、まずそのばあいの意味について考えてみることにした。さて、そのためには、それに先だててひとつひとつの単語に関する問題について全体的に概括して述べておくのがよいと思われる。常識的にみて単語には語形と意味の両面がある。この二つは切りはなしうるものではないが、一応どちらかを主にして取りあつかうことにし、問題を二つに分けてみる。ひとつの単語でもいくつかの語形をもっているものがある。いわゆる活用とか曲用とかがそれである。その形の変様に対応して意味の変様があり、その対応は規則的である。また、同じ形に対して異なる意味の存在することもある。多義語とか同形異語とかである。同じ語の範囲内にあるものが多義語でそうでないものが同形異語である。言語情報処理のいろいろなばあいに、これらの処理が必要になってくる。たとえば同じ形をした別なことばを見分けたり、多義語の、その文脈のなかでの意味を捕えたりすることは重要な問題になってくる。用語調査のやや進んだ段階を考えるならば、活用した形を識別するという操作も必要になってくると思う。用語調査を利用した IR のための自動索引づけ、自動抄録のばあいも当然必要不可欠のものとなる。

多義語の意味の認定、同語異語の判別などを機械が判別するためには一般に文脈が利用される。ところで文脈とは何か。これについてもいろいろの見

解があると思う。従来の言語情報処理では《microcontexte》というようにことが議論されている。^注これは文に相当するらしい。しかしもっと小さい文脈もあるのではないか。これについては、筆者の考えを後で述べてみたいと思う。

単語の意味については、いわゆる I R において、シソーラスがとりあげられていることについてもふれておこう。これは単に同義であるというだけでなく、何かの関連があるかどうか、あるものが他に含まれるかどうかというような上下関係、包含関係も問題にされる（このようなばあいにも、この論文で取りあつかう単語の集まりのばあいの意味がやはり問題になってくるのではないかと筆者は考えている）。

シソーラスについてはいろいろの問題があるが、ここでは単語連続の意味をとりあげるばあいに、それにふれることにする。

C. 単語の集まりのもつ意味

この論文で単語の集まりとか単語の連続とかと表現の用語を用いてあらわすものは、同じものであるが、単語のばらばらなあつまりあるいは、複合語のことではない。つまり辞書や類義語集のような集まり方をしたのではなく、syntactic に結合したものをさすことにする。そしてそのばあい、複合語のように完全に一語となってしまったものではなく、いくつかの単語が集まって syntactic に連なっているものを指すことにする。文を取り扱ってもよいのであるが、文までいくとそこにはそれなりの、話手と聞き手、陳述、文の統一などの問題がからまってくる。ここではそれについて考える余裕がないので、以上のような限定をおくことにする。

さて、このような単語の集まりすなわち単語連続のばあいに、まず、どの単語とどの単語がどのように結び合っているのかを機械が判定するという点に第一の困難な問題が存すると考えられる。そこで、ここではこれを中心に取りあげてみたいのである。

このような、構文の認識においてambiguityの生ずる点があり、これにつ

注 M.Coyaud : Quelques problèmes de construction《langage formalisé sémantique》. 《La traduction automatique》mars 1963

いてふれた論文は数多いが、九州大学の田町常夫氏は「機械の文法」などでその問題点を要領よくまとめておられる。^{注1}

この型のひとつに接続詞などでつながれるばあいがある。そのような問題のひとつをとりあげて、筆者はかつて発表したことがある。^{注2}

これは並立助詞の「や」「と」で結ばれることばの脈絡のつかみ方に関することである。ここに簡単に要約するならば、いま「AとBのC」というような単語の連続があるとすると、それは、「A」と「BのC」とも、「AとB」の「C」とも解される。そのいずれであるかということが識別されなければならない。筆者は、このようなばあい単語の word class を調べて、これを確率的にきめることができると考えたのであった。すなわち、実際の文章で調査した結果

「A」と「BのC」であれば「A」と「C」の語類が、

「AとB」の「C」であれば「A」と「B」の語類が、

同じ class に属することが多いことが判明したので、これを逆に使って(同じ class かどうかは国語研究所報告『分類語彙表』(林大氏担当)によった^{注3})

「A」と「C」の語類が同じなら「A」と「BのC」

「A」と「B」の語類が同じなら「AとB」の「C」

であると判定するという方法である。そうして実際に調べてみるとこのように判定できるばあいがきわめて多い。^{注4}

以上が小文「並立助詞『や』『と』の機能」で述べたところである。さてそこでは並立助詞であるということで「や」も「と」もひとしなみに取り扱ったが、そこでも述べたように、「や」のばあいよりも「と」のばあいの方が例外が多い。「と」の方が neutral なのかもかもしれない。国広哲弥氏は、この種の助詞の意義素について発表されたが、^{注5}その中で「や」の意義素について「同類を個別的

注1 そこではそれをいくつかの型にまとめて解説されている。

田町常夫「機械の文法」『数理科学』1966. 10

注2 「日本文の構造分析」情報処理学会機械翻訳研究委員会 1964. 7

「並立助詞『や』『と』の機能」『計量国語学』32. 1965

注3 以下に『分類語彙表』というのにこれをさす。

注4 「AとBのCと」のような形をとっているばあいには、形の上から手がかりが与えられている。

注5 国広哲弥「And と『と・や・に・も』」『言語研究』50号

に例として挙げる」といわれている。これによれば「や」でつながれているものは同類としてあげられている、ということになる。そこで今回はこの例としてはこの前と同様に国語研究所で行なった規模の大きな用語調査『現代雑誌九十種の用語用字』の資料を用い、これを再び検討しなおすことにした。ことに今回はさきに例外としてはずしたものについて再びとりあげて重点的に考えてみることにする。

さて、まずはじめには、例外でないものの例、をあげてみることにする。このようなものの例はかなり多いので、ここでは十数例をあげておくにとどめる。()内は分類語彙表の分類番号を表す。

- * 1. 思春期ノイローゼが、この子供からおとなになりかけの時であるだけに「対人恐怖症」が圧倒的に多いことはその特徴といえよう。前記の先生(1.241)や同級生(1.241)に対して赤面する型(1.1100)や結婚(1.355)をきらうタイプ(1.1100)がこれだ。〔週刊読売4月22日8ページ〕
- * 2. 谷崎家の親戚の殆ど全部が蠟燭町(1.259)や兜町(1.259)や杉の森(1.259)辺の相場師であった関係から、〔文芸春秋1月311ページ〕
- * 3. 時には双生児(1.205)や三つ児(1.205)を抱えこんでも平気で〔文芸春秋, 11月265ページ〕
- * 4. 親愛なアメリカの兵隊さん、あなたの奥さん(1.211)や恋人たち(1.211)はいまごろどこかの男とよろしくやっていますヨ〔週刊サンケイ2月19日22ページ〕
- * 5. 私はものを発表する場合、匿名(1.3102)や擬名(1.3102)は一切用いない〔葦11月38ページ〕
- * 6. 古くなったビニールのふろしきはあまり使い道がありませんが、わたしは去年の冬これを利用して炊事(1.3843)やせんたく(1.3843)用の足袋カバーを作り重宝しました〔家の光3月234ページ〕
- * 7. 特に社会主義(1.3080)や共産主義(1.3080)に反対の方々に今後は是非沢山来ていただきたい〔人生手帖3月42ページ〕
- * 8. 絵(1.322)や彫刻(1.322)に起こっている抽象芸術の傾向は写真(1.322)や映画(1.324)によって写実的な場所を占められたことからきているだけではない。

- * 9. 二人は、新宿のデパートへ、足を運んで、まず、茶椀(1.452)や箸(1.452)の買物から、始めた〔週刊朝日8月5日57ページ〕
- * 10. 私は自然的なもの、つまり雨(1.5153)や風(1.5151)などをそれほどおそろしいとは思いません〔葦5月22日〕
- * 11. 狭心症(1.586)や心筋梗塞(1.586)というものに対して、私の意見は日本の学者の考え方と多少違うところがある。〔文芸春秋6月160ページ〕
- * 12. この作家がしたしみ深い民衆的な詩人の先駆者として近世の俳句作者少林一茶(1.209)や近代の石川啄木(1.209)などと通じ合うことになった歌人の一人であることを示していますが〔葦9月77ページ〕

用例1においては「先生」と「同級生」、「型」と「タイプ」が、2においては「蠣殻町」と「兜町」と「杉の森」が、3においては「双生児」「三つ児」が、4においては、「奥さん」と「恋人たち」が、5においては、「匿名」と「擬名」が、6では「炊事」と「せんたく」が、7にあっては「社会主義」と「共産主義」が、8にあっては「絵」と「彫刻」、「写真」と「絵画」が、9にあつては「茶椀」と「はし」が、10では「雨」と「風」が、11にあっては「狭心症」と「心筋梗塞」が、12にあっては「小林一茶」と「石川啄木」がそれぞれ助詞「や」で結ばれており、しかも同じ語類に属している。そして、「や」で結ばれる語は単に前と後ろだとしておいて、機械に、機械的に行なわせるとすると、たとえば用例1で「型」とその直後の「結婚」を結びつけることもしかねないが、ここでのべたような規則を適用してこれを防ぎ、「型」と「タイプ」を並立させる方法も考えられる。

このような合致はなぜおこるのか、それをここで考えてみるのは無益ではなかろう。筆者の推測は次の通りである。まず「や」という助詞の側からみるとこの助詞は「同類のものを列挙する」(前掲国広氏論文)という性質をもっている。次に分類語彙表の側からみるとこれはいわば類義語集であって、同じ意味のものがひとつところにまとめられている。このような点からみて、上述のような合致が起こるのは必ずしも偶然とはいえないのではないか。

この種の合致が助詞「や」で結ばれる一連の語句が統辞論的にみて単一のタイプだけに起こるのではなく、いろいろな文型のぼあいにおこっていることも注目してよいと思う。すなわち、名詞の部分で…で表わせば上の用例でも、

……や……が (1)

……や……は	(4) (5)
……や……の	(2) (9)
……や……を	(3)
……や……用の	(6)
……や……に対して	(1)
……や……に反対の	(7)
……や……におこっている	(8)
……や……によって	(8)
……や……などを	(10)
……や……などと	(12)
……や……というものを	(11)

のようになっていて、「や」で結ばれたことばが文の成分の各種のものとなっていて、しかもそのいずれにおいても「や」で結ばれることばが語類の一致をみせているのである。

このようにみてくると構文上の形成とそこに置かれる語の語彙論、意味論的な交差に関する研究が、自動構文分析にとって重要であると考えられる。「や」でつながれる語の語彙、意味論的な一致はさきにしめした12例にあってはかなりよくうかがわれた。しかし、実際の文例では常にこのようによく一致するわけではない。次に、「現代雑誌九十種の用語用字」調査のカードのなかで、このような一致のみられない例をとりあげ、これを分類して問題点のありかを考えてみることにする。

a — 分類語い表にもれている例。

*13. 河野, 小野, 金子, 上迫, 久保田などのベテランが, 日本の得意とする徒手(1.3393) や鉄棒(1.457) や跳馬(1.3773)などで, 優勝から三位入賞の機をねらっているのも〔週刊朝日 1月1日29ページ〕

この例では「鉄棒」が他の二者に比して著しく異なった語類に属している。この語類の1.4というのは人間生産物または用具であって、鉄の棒それ自体はまさに1.4ではあるが、この文脈の「鉄棒」は実はそれとちがって、鉄棒による運動競技をさしている。従って分類語い表の原理に従えば1.3に属する。

とみてよいであろう。いわば「鉄棒」は多義であって、このばあいの(1.3の)分類項目のなかにたまたまあげてなかったというにすぎない。したがって『分類語彙表』を増補すれば問題は解消するわけである。

*14. 杉村, 長岡は貫録を見せる。河野国夫装置は無難だが崖の上の場面の危機感が不足で, 家の場でも下手への連絡感が曖昧。効果(1.1112)や音楽(1.3231)も作品の性質上もっと生かせる筈だ。〔文芸春秋 5月117ページ〕

これも13のばあいと同様であって, この文脈の「効果」は演劇の無台効果音であるから, 音楽と同類とみてよいと思う。

b ——分類語彙表の多次元化

*15. 例えば飛行機で種(1.553)や殺虫剤(1.436)をまくことは, アメリカの一地方では, 現実の問題である。〔文芸春秋 4月58ページ〕

*16. 穀類(1.4320)やイモ(1.552)など主食類は年々減りつつあるが, 反対に菜葉類, 実のなる野菜, 果物, 豆類それにタマゴや牛乳生産などがわずかずつながりふえている〔エコノミスト 9月29日65ページ〕

『分類語彙表』の分類原理は1.4は上述のように「生産物および用具」, 1.5は「自然物および自然現象」であって, この二つの相違はそこに人間の手がかえられているかどうかによる。これは一つの分類原理ではあるが, われわれの実際生活, 日常生活にあっては, このことが顕著に現われ, またこの区別が有効であるばあいもあるけれども, この区別がさして問題にならないばあいもまた存在することがありうる。たとえば16番の例でいえば, 「穀類」と「イモ」が1.4と1.5の相違があるにしても主食類であるという点では共通しているわけであり, この文脈ではそちらの方が強調されて, 取りあげられているとみてよいと思う。15番の例についてもその事情には共通のところがあって, 農業上の作業として「まく」ものは, 「種」も「殺虫剤」もある意味では同じ項目のなかに入れてよいはずである。この種のもは同時にいくつかの分類原理が想定され, そのばあいはあいにによってそのいずれかの観点からみた親近性, 対称性, 離反性が考えられ, グループの成員に変動が起こりうる。このようにみえてくると, この種の目的で分類語彙表が使用されるとすれば, そ

の性格は単一なものではなくて、多次元化されたものでなければならない。

このような考え方から『分類語彙表』の分類原理を見直してみよう。この分類原理についてはその「まえがき」に次のように説明してある。「なお一つの項目中に収めた語の性質についてつけ加えておきたい。それらの語は、同義類義の関係で一つにまとめられているものである。同義とか類義とかいうことの意味については、ここで詳細に論ずることはできないが、いわゆる待遇(敬意の方向と量)や、美醜、新古、詩性などの語感をぬきにして、同じ文脈の同じ地位(また転換された文脈の相当する地位)に現われることが許される限りのものである。その限度は広狭さまざまのとり方があって類義の範囲は広がり得るのである。しかしここではあらゆる文脈について検証した結果を示すのではないことをことわっておかなければならない。」^{注1}

ここで、同じ文脈のなかに現われることを分類の基本原理としているが、これは一つの方法であって、そのゆえにさきに示した文例1ないし文例12のようにさきに述べたような法則に適合する例が出てくるわけであろう。したがってこの意味からは、上に示した例外は「あらゆる文脈について検証」することが困難であったためであると考えられる。しかしこれに続いて言い添えられている次の分類原理には問題が存する。「もう一つのことわりは、一つの項目に収めたのは同義類義の語の群であって自由連想による語群ではないということである。従来の分類体辞書のなかには、生活場面を分類してそれぞれの場面に現われうる語をあげる、会話書の色彩の強いものがある。実用例には最も自然な体裁で、生活場面と語との関係を見るのに有効で便利なものではあるが、ここではむしろ、一つの意味が生活場面に応じてどのような語として現われるかに関心があって、自由連想をことさら極力避けようとした。項目間の排列はいわば連想的なものであり、項目内の語の排列も、生活場面による自由連想を全く排除し得たとは言いきれないが、趣旨としては以上の通りである」。^{注2}

これは一つの態度であると思し、このこと自体は必要なことでもある。しかしこのままで終わってしまうと一つの問題がある。「たとえば〈ビール〉

注1 『分類語彙表』まえがき6ページ

注2 『分類語彙表』まえがき6ページ。

については、飲酒行動に関連して、〈酒・スタウト・ウイスキー・飲む・酔う・一杯・あわ・ジョッキ・コップ・ほろにが・ホップ・赤ら顔・ビヤホール〉等々が連想されるであろう。しかし、この一群の語は、〈飲む〉や〈コップ〉にとっては必ずしも同等の重要性を持つとは言えない。それにはその連想語群がある。連想語群をとらえることも語彙論上の大切な仕事であると思われるが、ここでは、〈ビール〉をただ〈酒・ウイスキー・スタウト〉とグループをなすものとして扱い、〈飲む〉や〈ビヤホール〉との関係を断ったのである。』^{注1}

その関係を断つのは一つの行き方ではあるが、しかし断ったままにしておくことこれらの語がばらばらになってしまう。そこに問題が残りはしまいか。少なくとも筆者のような使用法を考えるばあいには不十分である。「ビール」——「ビヤホール」——「飲む」。これは生活的にみると一つの世界をつくっている面がある。従ってそのような面からの関連づけをこれに要求したいのである。『分類語彙表』の分類の系列がひとしくある方向をもったものであるとすれば、この要求は、それと全く違った方向をもった系列での位置づけであるといえよう。したがってこのような見方をしたばあい、全体としてみると分類彙表が多次元化してくるはずである。^{注2} さきほどの例でいえば

酒・スタウト・ウイスキー・ビール	(a)
飲む	(b)
酔う・酔っぱらう	(c)
一杯	(d)
あわ	(e)
ジョッキ・コップ・グラス・さかずき	(f)
ほろにが	(g)
ホップ	(h)
赤ら顔	(i)
ビヤホール・バー	(j)

などはひとつの世界を形作っているといつてよい。もっともこまかにいえ

注1 『分類語彙表』まえがき6～7ページ。

注2 分類語彙表の多次元化については宮島達夫氏の『語彙教育』1964参照。

ばホップと酒は結びつかないしウイスキーとジョッキも結びつかないけれども、したがって同じ系列のなかのそれぞれの語のにはそれぞれの分野が存在するわけであるけれども、全体として大きくみればあい、ひとつの世界をなすといつてよいのである。もっともこの世界はこのような観点からみればあい、いわば閉じた世界であるが、たとえばひとつ(j)のピヤホール・バーをキャバレー・ナイトクラブと広げてゆくうちはまだよいとして(実は別な要素が少しずつはいつてくるが)、料亭、レストラン、料理屋、喫茶店というのを加えてゆくと、(j)の系列はそれ自体でひとつの世界を形成しはじめそれは(a)~(j)の世界と必ずしも融合せず、隣りの、または近接した世界が開けてくる、と考えられる。このように定義された世界は、互いにくつも重なりあい、ある世界とある世界は互に共通な部分を有し、また共通ではない部分をも有し、隣りあい、あるいは離れていながら対応しあうというようなことがあるに違いない。^{注1} とにかくこんな形で存在する世界を想定することが可能であるまいか。このような世界が想定可能であるとすれば、その世界はことばを通してみた概念の世界であり、生活のひとつまひとつまを表わす心理的な世界であり、言語表現に反映する確定した径路をもつものであろうが、そこにはそれなりの構造をもつものと考えられる。そのなかに含まれるそれぞれの要素は互いに特定の関係をもつて連絡しあっていると考えると、その状態を記述することが可能である。そのような関係のしかたにはいくつか多数の方向、視点があって、さまざまな様相を呈すると考えられる。つまり多次的である。分類語彙表もこれを反映し、これを記述していることが望ましいのである。^{注2}

注1 たとえば「映画」の世界のなかの「映画館」は「演劇」の「劇場」に当たるというように、異なる世界の間に対応のあることが数多くあるであろう。そしてそのような系列自体が一つの世界をつくることもありうる。

注2 このようなことを考えておくことは、たとえばBの項で述べた単語の多義性の識別、あるいは同形異語の識別の問題に対しても有効であると思う。例がいささか特殊であるが、古典文学期のポルトガル語で *erão tantas as espinhas, que logo o afogauão*。『ルイス・フロイス書簡』という、「いばらが多くて、たちまちこれを枯らせる」とも、「困難が多くて、すぐ挫折する」とも訳すことができるが、この前に *como o grão nacia* 「穀物が生ずると」という語句があることによって全体として前者の訳を採択すべきことが決定される。すなわち「穀物生ずれば荆棘甚だ多くして直に之を枯死せしむ」(大日本史料訳文)となると考えられる。このばあいの *grão* と *espinha* と *afogar* とは一つの視点から見て訳されると考えられる。

さて、『分類語彙表』においては「同じ文脈の中に現われる」ことが分類の基準とされてきた。このことと今のべたこととはどのような関係があるだろうか。こんどはことばの世界として考えてみると、『分類語彙表』の「同じ文脈のなかに現われる」ということは、ソシユールの用語を用いれば、一つ文脈のなかのある位置に現われる語として、いわば連合関係(rapport associatif)にある語であるということができる。それに対して、ここで問題にしている世界は、そのような文脈のなかの統合関係(rapport syntagmatique)を含めて、それぞれの位置における語の間の関係、そのような文脈全体のなかでの語の全体的な関係をみることになる。これがさきに述べたものの世界なかでの世界と多分関係があるように思われる。^註 筆者のいう文脈を最も小さい範囲に限れば連語になるが、このような連語の形成法とその意味の研究が、このような観点から研究される必要がある。また、ものの世界と、言語の世界の関係づけが必要となってくるであろう。

連語の形成という点についてみると、たとえば上掲(j)の系列の語(場所を表わす語)や(a)の系列の語(飲料をあらわす語)が、(b)の動詞と助詞「で」「を」介して結合するというような言語表現の形の上での事実や、「ピヤホール」——「ビール」, 「ビール」——「ジョッキー」, 「ウィスキー」——「グラス」のような物の世界の秩序およびその言語表現との関係が記述されなければならぬ。

*17 さらにたとえば機械を導入しても思わしい増収にならず、その維持(1. 1250)や償却(1. 378)が大きな負担になる——といったばあいが考えられる。〔農業朝日 4月号31ページ〕

この例のばあいには企業体のなかでの機械のありかたについて

機械——その維持——その償却

というものが一つの次元として関係しあっているような、「機械」についての世界が考えられる。そのようなものの世界のあり方がこの言語表現を可能な

注 このような意味でたとえば R. Harrig. W. von Wartburg: Begriffssystem als Grundlage für die Lexikographie, Berlin 1952 のような分類語彙表の分類原理によるものもまた有益であると筆者には考えられる。

らしめているのである。このようなことがある限り、この種の分析に使用されるワード・リストは、この、ものの世界の秩序を反映しているものであることが望ましい。

＊18 年の若い映画にとっては技術(1. 3421) や表現(1. 3103) がまず大問題であった。

この例文においても事情は同じである。この分析のために、一つの語い表を(つまり概念表でもある)考えてみた。言語の世界でもあるし、ものの世界でもある。言語の世界でいえば、このようなものの世界のあり方を反映して「映画を鑑賞し」たり「映画を製作し」たり、「スタジオで撮影し」たりするというような表現が生まれるのであろうし、ものの世界では、このような秩序に従って作られ、上映されるのであろうと思う(もちろんしろうとがかりに作った表なので見当ちがひも多かろうと思うが)。四角のますを結ぶ線はそれぞれの間の関係を示し(実はこの線はその位置によってすべて異なった内容のものであるが、いまいちいちいわない。四角のますの位置とその関係は、その機能をひゆ的に表現しようとしたものである。いわば多次元の事態を二次元の紙の上に書き表わすのであるから、不自然さはまぬかれえない。例文23の「技術」と「表現」は実はこのような環境のなかにおいて理解されるべきであらうと思う。注

＊19 それゆえ、このような意味からも資金の用途(1.1113)や内容(1.132)について銀行は責任をもつべきであるが[実業の日本,5月15日号21ページ]

注 あとでも述べるけれども、この種の語い表は単に助詞「や」で結ばれる文脈をたどるばあいに有効であるばかりでなく、そのほかの種類の構文の解析のばあいにも有効であると考えられる。たとえば次の文

＊ 「出演は若い夫婦にジャン・クロード・ドルオーとクレール・ドルオー、製作は「シェルブールの雨傘」で64年度のルイ・ドリュック賞をさらった女流プロジェーサマグボダール」(映画「幸福」のパンフレット)にあつては「出演」と「ジャン・クロード・ドルオー……」,「製作」と「マグボダール」の関係がこの語彙表のなかにあつても並行的であつて、構文分析の上でそのような情報が有益であると考えられる。なお、この種の構文のあり方については、筆者は計量国語学会第九回大会で発表したことがある。要旨は『計量国語学』35号、「構文論上の一関係」

この例では、形の上では「使途」と「内容」が「や」でつながれているわけであるが、実は(dで述べるように)「資金の内容」と「資金の使途」がつながれているとみるべきであって、いわば「貸方」「借方」のような関係にあるといえよう。「資金の内容」と「資金の使途」はあとで述べるようなそれぞれのことばの意味の和によってこのような世界のなかでのある位置を占め、それが「や」でつなぐことを可能にするような位置にあるのだと考えられる。

なお、いちいちについてとりあげないが、次のようなものも以上のものと同様に考えて処理することができる。

- *20 単にその時の創作方法が変化するだけでなく、過去の作品(1.320)や作家(1.2410)の評価が変り、基準もまた変ります[世界7月201ページ]
- *21 「それは酒(1.435)や女(1.204)だけではない。あらゆることをしていると思っている」[文芸春秋 付録 224ページ]
- *22 例えば学校(1.263)や町会(1.273)などで行われる夏の朝のラジオ体操 [婦人画報 8月号209ページ]
- *23 偏食を矯正する方法にはさまざまありますが、調理法をかえてそのものの形(1.180)や味(1.505)やにおい(1.504)などがわからないようにして食べさせ[主婦と生活 2月号429ページ]
- *24 夜閉店後に商品の整理(1.3063)や値札、ショーカードの手入れ(1.3850)などを行なって[商店界 10月号57ページ]

e「……のx」

- *25 農繁期中みんなが丈夫で元気よく働けるように家族(1.210)や隣(1.1771)近所(1.178)と話し合います。

この例にあっては「隣近所」は単に「位置が隣である、近接している」ということでなく、そこに住んでいる人を指すとみてよい。このようにあることばがその意味だけでなく、その……をさすことはしばしばある。このようにみえてくると、「家族」に対するものは「隣近所の人」であって、この辺はもしbで述べたような立体的な語彙表が作成されるとすればそれが利用されることになるろう。さらに「……の……」の型の研究、どんなものがそのような形で表現されるかという研究などと、その発見と解決のためのアルゴリズムが求め

られることとなる。次に示す例も大体これと同様に考えてよからう。

*26 そして吉田内閣当時の隠退蔵物資(1.410)や終戦処理費(1.373)にかわって新しいフハイの源泉となったのである。〔知性, 11月号 345ページ〕

*27 企業者の一人一人が自発的に、繰延べてくれれば申分ないが、わが国の企業者は繊維(1.550)や百貨店(1.265)のかけこみ増設の例に見るように、政府筋が投資を抑えてほしいと思っていることがわかると逆に投資を急ぐ習癖がある。〔農耕と園芸 10月号 40ページ〕

d—いくつかのことばによって言い表わされるもの。意味の合成。

さきに「資金のや使途」という表現において、単に「内容」と「使途」がならべられているのではなく、「資金の内容」「資金の使途」がならべられているのだという説明をした。このように、いくつかのことばを連ねて言い表わされたことを、全体として一つのまとまりをもったものとして取り扱うことが必要であると考えられることがある。

*28 そのメドを求めて、福沢は、感情(1.3004)や内的世界(1.264)に現実が「鋭く反映される」ことを……〔美術手帖, 9月号 43ページ〕

この例文において、「世界」は分類番号1.264に属するが、感情に対するものは「内的世界」である。「内的世界」は一つのことばと考えると分類番号を与えるとすれば、この問題は解決するかもしれない。しかし、これが「内的な世界」というように表現されたらどうであろうか。そういうばあいでも「内的な世界」が「内的世界」と同様に処理できれば便利である。たとえば次のように書いてみる。

内的な(3.170)+世界(1.264)=1.300

ところで、現在の『分類語彙表』でも、次のような演算は可能である。たとえば1.301₂に属する「安心」「心配」「憂慮」「懸念」「危惧」「焦慮」「躊躇」「逡巡」などに対して、2.301に属する動詞としてたとえば「案ずる」「きづかう」「うれえる」「ためらう」「あせる」などが対応させてあるが、この1.301₂に属する名詞に「する」「される」「させる」「なさる」「なす」「いたす」など、2.342に属する動詞をつけてつくったことば「安心する」「心配する」「憂慮する」「懸念する」「危惧する」「焦慮する」「躊躇する」「逡巡する」などは、上掲の2.301に属する動詞と同じような意味をもつ。したがって、

$$1.301_2 + 2.342 = 2.301$$

のような公式をつくることができる。^注

同様に、「思考」「思索」「思案」「熟考」「冥想」「考案」「案出」などの1.306に属する名詞に「する」など2.342の動詞がついたばあいには、「考える」「考えこむ」「おもんばかり」「かんがみる」「考え出す」など、2.306に属する動詞と同じ意味となると考えられる。したがって次の式が得られる。

$$1.306 + 2.342 = 2.306$$

このようにして、動作性の意味のある名詞にはすべて上に示したような形の式を作ることが可能である。

このように『分類語彙表』では、この種の操作が並行して行ないうるように作成してある面が、すでにあるのであるが、将来作られるべき（bで考えたような複雑な次元を示すことのできるような）分類語彙表でもそのような操作ができるものとして、いましばらく『分類語彙表』の番号を借りて表現してみることによって、このような意味の合成について考えていってみたいと思う。

※29 病氣(1.585)の種類(1.1100)や病状(1.585)に応じてカクテルとして用いられます[婦人生活 11月号431ページ]

この例文にあっても「病状」に対するものは「種類」ではなくて「病氣の種類」

注 ただし細かくいえば1.301₂に属する名詞のなかにもいろいろの意味があり、たとえば「心配」と「憂慮」は近いにしても、「心配」と「安心」は対立する概念である。このように、じつはいろいろな段階のサブ・グループがある。いっぽう2.342に属する動詞にもすべてにこのような機能があるわけではなく、このような機能をもたないものもある。またこのような機能をもっているも、「する」と「なさる」では敬度が異なり、「する」と「される」では動作のありかたが異なるというように、いろいろの次元、系列の異なりが存する。したがって、できあがった2.301の動詞はそのような複雑な構成をもったものであるはずであり、それは2.301にもともと属していた動詞それ自体も、そのような構成をもつものである。たとえば「心配される」に対して「気づかわれる」があるように。このように事態はかなり複雑なものであると考えられるが、それを上掲のように簡単な形の式にして書いておいた。そのように簡単な形で表現するというにも一つの意味があらうと思われるからである。

「心配する」はまた「心配をする」のように表現されても同じように処理することができよう。「安心する」に当たる「案ずる」系の動詞がないが、これが「心を安んずる」という形式で表現できることも、上と同様に考えることができる。

であると考えてよいと思う。そうすれば、上にならって

$$1.585+1.1100=1.585$$

であると考えてよいかもしれない。さて、ここでひとつの問題がある。これは『分類語彙表』のもっている、ひとつの問題でもある。現在のままで『分類語彙表』をみると、「病状」は1.585の病気の項に属し、「症状」は1.1300の様相の項に属している。1.585に属しているのはそれが病気に関するものであるからであり、1.1300に属しているのはそれが様相の一つであるからである。そうしてみると「病状」のみが1.585に属し、「症状」のみが1.1300に属しているというだけは不十分であって、この両語は共に1.585にも1.1300にも属していなければならないはずである（そうになっていないのは、単に、もともと『分類語彙表』作成時において、その作業について細かい点にまで精密を期することが困難であったからにすぎない）。さて、この論文のbの項で考えたことをもとにして考えると、『分類語彙表』においては二つの場所を占めることになっているものを、一体化して示せることが望ましい。すなわち多次元世界のなかでのいくつもの視点でみた位置が、全体的にまとめられていることが必要である。「病状」は「病気の状態」であるからこれを

$$1.585 \circ 1.1300$$

と書き表わすとする、「病気の種類」は

$$1.585+1.1100=1.585 \circ 1.1100$$

と書き表わすことができる。注このようにみるとすれば「病気の種類や病状」という単語の連続においても、助詞「や」でつながれているものが意味的にも同じような資格をもつものであることを示すことができると考えられる。ここで、1.585の方は共通であるにしても、1.1100と1.1300の方は（大きくいえば近いものであるといえるが）こまかくいえば同じではない。しかしこのような差をつけない見方（観点）があるから、このように「や」でつなぐ

注　　は、ここでは、分類語彙表のなかのそれぞれの意味を示すところの、ある点とある点とを結びつける関係があることを指示しようとしたものである。実はこの関係自体、種々の内容をもつはずのものであるが、そうしておそらくそれは細分し定義しうるものであるが、ここではそれを大きくまとめて示そうとしたのである。これをこまかく分け、それに言語表現が、どのように対応するかを考えてゆくことができる。

ことが可能であることになったのであろう。この点についてはなお、後で述べる「種や殺虫剤」についての問題がある。

*30. あのととき壁画(1.322)の断片(1.186)や塑像(1.457)をアメリカへもって帰ろうとの決心を

この例にあっては簡単に処理できない面がある。しかし例文29で考えたような助詞「や」で結ばれることばの間の相違の延長拡大したものとみることもできなくはなからう。このような例にあっては意味の合成について考えてみることはやはり有益であろうと思う。

*31. 業者に買急ぎの傾向がみられないことや信用状の開設状況などからみると…〔東洋経済新報、10月6日号46ページ〕

この例の「こと」でしめくくられているような内容についてもそのようなことがいえる。これもいますぐ式化することはできないけれども、このようなものも扱いうることが望まれる。そしてこのような例を処理するためにはやはり意味の合成についての研究が必要であろうと思われる。

例文19にあっては「資金の用途や内容」を扱ったが、「資金の内容」は上述のような意味の演算によって「借方」であり、資金の用途は「貸方」と考えてきたが、これも上述のような方法によって

資金(1.3721)+の+用途(1.1113)=1.372・1.1113=貸方

資金(1.3721)+の+内容(1.132)=1.372・1.1113=借方

のように書き表わすことが可能である。さて、いま「借方」の分類番号を1.3710とすると

1.3710=1.3720・1.132

のように展開することができるのではないか。このような操作によって種々の演算の可能性もまたうまれてくるのではあるまいか。そのようにすることができるとすれば、たとえば「のこぎりとは材木をひき切る工具である」という文をもとにして、〈のこぎり〉の意味、そのものとして持っている性格を明らかにすることができ、そのことから、語の意味の全体系のなかに、その多元性のなかに、この語のもつ意味のさまざまな面を位置づけることができはしないか、などと考えられるのである。しかし、どのようにすればそれが可能か、については、もっと方法をリファインしてゆくことが必要である

る。しかし、このことから、この論文のbの項で考えたこととdの項で考えてきたことは、互に大きな関係をもっていると考えてよからう。

いわゆる自動構文分析においては、従来は主として言語の形の上に現われるものを手がかりとしてこれを進める方法をとってきた。もちろんこの方法は重要であり、全体としての分析手法はやはりその方法を用いるべきであるが、しかしそれだけではうまくいかない面がある。人間が文を文法的に解析するばあいには、単に従来のような形の上からの特徴からだけで分析するのではなく、実は、文を読みとって、その意味を考えながら、ことばの切れ続きを考えているのだと思う。だとすれば、いままでの文法の程度の、つまり言語の形の上にはっきりでいる特徴からだけで、構文の解析を行なうことはできないはずである。そしてこのようなことのために、ことばの意味、いかにえれば、ことばによって言い表わされているものそれ自体の性質を考えてみるが必要であり、有効ではないかと筆者は考えているのである。ことばの意味を多次的にとらえようということも、ことばの連なりによって意味が複雑化し合成されるということも、そのようなことを考えるための一つの手段ないしは形式化にすぎない。ことばをつなぎならべることによって、それによって言い表わされることが複雑化し、多面化する、そのようなことをなんらかの形でおさえることが必要なのではないか、このようなことを言っているわけである。自動構文分析においても、上述のようなことがあるかぎり、すなわち言い表わされている内容から逆に文の構造を判定しているというようなことがあるかぎり、この論文で考えたようなことが必要になってくるのではないかと思う。

したがっていままで故意に強調してこなかったけれども、言語の形の上にあられる、従来の文法などで考えられてきたことはもちろん重要であり、したがって分析を進めてゆく手順のなかでもそのような形の上での特徴について情報は十分これを保持してゆかなければならない。そのような形の上からの分析だけはいろいろな分岐点が生じ、解釈のしかたが何通りもあることによって何通りもの解が生まれるであろう。そのような解のなかで適当なあるいは妥当な解を選択するためには言語によって表現されているものやことについて考えてみ、あるいは操作することが必要でありかつ有効であろうと

思う。このような二つの面からの方法をどのようにかみあわせ、ないまぜてゆくかに、構文分析を進める手順の合理化という問題が生ずるのであろう。

ここで、語形上の情報と意味上の情報についてふれたが、この二つの間には、別の面からみると緊密な連絡があるはずである。たとえばいままでは助詞「や」でつながれる名詞について考えてきたが、これが更に他の語と関係する面を考えてみればわかることである。たとえば、例文 16 の「風行機で種や殺虫剤をまく」の例をみると、並べられたものが「種」と「殺虫剤」であるがこのいずれも「まく」に関係している。「種をまく」「殺虫剤をまく」という表現が可能であるからこそ、かつその二つをここで表現するのであるからこそ、「種」「殺虫剤」が「や」で結ばれているのだともみられる。「種」も「殺虫剤」も「まく」ことができるからこそ「や」でつながれていることができるのだということができよう。^{注1} 意味の取り扱いにあたっては、このような取り扱いも必要であろう。いままでものをものとしてみた面があるが、言語表現の上からこれを扱ってゆくことが、ことばの意味の扱いとすると、重要である。そしてこのためには次のDで扱うようなことばの組み合わせ、すなわち連語に関する研究が重要になってくる。

以上の諸例では助詞「や」で結ばれる名詞について考えてきたが、他の文型についても、同様の考え方をしてゆくことができるのではないかと考えられる。たとえば

青い目の少女

赤い屋根の家

のような単語連続における、意味のつながり方が問題になったことがある。

^{注2} このような例にあっては「目の少女」「屋根の家」のような単語の連なりが旧来の程度の文法では拒否しえないことに問題があるのであろう。ここではそのような表現がないことを示せばよいわけであり、「赤い屋根の」という表現が「家」にかかりうるものがあっても、すなわちそのようなしかたでの意味

注1 ここで一種の書きかえ規則のようなものを作ってみれば

「種をまく」+「殺虫剤をまく」→「種や殺虫剤をまく」。「種」「殺虫剤」「まく」をA, B, Cするなどで書き表わせれば、一般化することができる。

の結び方は可能であっても、「屋根の家」のような結び方がないということを経合式の有無によって示せばよいのであろうと思う。このようにすることによって、「赤い」「青い」は「少女」「家」にも結びつきうるという可能性をこの例文内では拒否することができるはずである。注³

この論文の方法では、意味を分類語彙の分類番号によって示したが、その点にも、問題がある。たとえば一つのことばの意味をいろいろな特徴要素の集合と考えることもできる。注⁴ このような考え方をしたばあい、『分類語彙表』の分類番号はそのような比較によって生ずる特徴の束の排列番号になるであろう。どちらの方法も結果的には同じものを得られることがあると思う。ただし分類番号によるときは、その分類として用いられている特徴のそれぞれを厳密に定義しておくことが必要であろう。そうでないと、前に用いた展開のような方法で特徴を分析してゆくばあいに、誤るおそれがある。

以上、人間のことばを機械が「理解する」ばあいの問題をとりあげ、その一つとしてことばの続きぐあいを調べることをとりあげ、さらにその一つとして助詞「や」でつながれることばの例について考えてみたわけである。そしてその結果としては、「や」でつながれるものに word class の一致が多いこと、ただしその例外があるが、それはことばの意味について考えてみる必要があり、そこで意味の世界が多次元的事であること、ことばの連なり全体を一つのまとまったものとして考えてみる方法があること、などを考えてみたのである。そのようなことによって、「や」で連ねられたことばの処理法が一元化できるのではないかと考えている。またこのような見方は単に「や」で名詞が並立されるばあいに限らず、いろいろな形の文型に応用できそうであることなどを考えてみたのである。このようにこの節では単語の連なりの意味について考えてみたわけであるが、次に、「単語の連なり」それ自体について考

注 2 「青い目の少女」は山田小枝氏が、「赤い屋根の家」は田町常夫氏が提出された。

注 3 連語の形成において、「ジュースを飲む」というのがふつであるのに対して、南不二男氏がいわれるように「こおったジュースをがりがりかじる」という表現が成立することがありうる。すなわち「ジュース」と「かじる」とが結びつく可能性がある。(南不二男「文の意味についての二三のおぼえがき」『国語研究』24号)。これについても筆者としては上述のような処理の方向で考えたい。

注 4 昭和 42 年 3 月 14 日の発表会のさい、早田輝洋氏からご教示いただいた。

えてみたいと思う。

D 連語とその意味

単語が連続したばあい、単にばらばらに並んでいるのではなくて、なんらかの意味で結び合っているものと考えられる。たとえば並立助詞「や」で結ばれている名詞は、学校文法の用語でいえば対等の関係にある、といえる。このような関係は学校文法ではそのほかに主語述語、修飾語被修飾語の関係その他がみとめられている。対等の関係というものは、実は他のものやや異なった面があるので(後述)、ここでは、むしろそれ以外のものを主として考えてゆくことにする。

次のように考えてみる。二つの自立語が関係しあうばあいを考えてみると、直接結びつくものと助詞を介するものがある。「一番 高い」「朝 咲く」は前者の例、「資金 の 使途」「本 を 読む」は後者のばあいである。この種の単語の結びつきのなかには、結びつきについての規則が存在する。「高い」ということばの前にはたとえば「副詞がくる」ということがあるけれども、語彙的に見てどんな副詞でもそこに位置しうるわけではない。このようなことばの結びつきには単に従来の文法で扱う程度での、品詞と品詞の結びつきがあるというだけでは荒すぎるのであって、その要素となる品詞の語彙的意味的な多くの下位区分にしたがってその結びつきの可能不可能が存在し、また結びつきに微妙な差異が生ずるものと考えられる。^{注1} このような単語連続を連語といふことがある。^{注2}

筆者の考えではこの連語を、単語連続の分析の、ひいては構文分析の、一つの手がかりとして利用してゆきたいのである。というのは、単語連続のばあい、その全体の意味を考えようとすると、まずそこに含まれる一つ一つの単語の意味とその結びつき方について考えてゆくのが便利であるからであ

注 1 たとえば次の文献を参照。

高橋太郎「動詞の連体修飾法」『ことばの研究』国語研究所論集 1 1959

同上「動詞の連体修飾法(2)」『ことばの研究』国語研究所論集 2 1965

根本今朝男「『が』格の名詞と形容詞のくみあわせ」同上

注 2 たとえば、鈴木重幸「文法について」『教育国語』1966～2。なお語結合という人もある。井桁貞敏『標準ロシア語文法』

る。その単語連続全体の意味と、その単語連続のなかの一つ一つの要素の意味およびその結びつき方との間の関係を調べておくことが必要であるからである。

三つ以上の自立語が結びついたらあいいには、その複合と考えられている。連語のなかには単純なものと、複雑なものがあることになる。この考え方を延長してゆくと、ある意味で、橋本文法の連文節に似た面が出てくる。このように連語が結びあっていって、最後に「完結した連語」ができる。これが文であるとする考え方もある。このような考え方は、例の phrase structure grammar の形式で書かれた文法を用いて構文の分析を行なうばあいいには便利などところがある、と筆者には考えられる。この論文のCのdの取り扱いにはそれに通ずるところがある。しかし、文となるためには、そこにさらに別な要素が加わると考えてこのような考え方に反対する意見もある。注はじめに述べたように、この論文では文の段階にいたるまでのことは考えようとしていないので、ここではふれないが、将来の課題のひとつである。

この論文のはじめに「文脈とは何か」ということについてふれた。もともと書きことばでは文脈によって文の意味や語の意味が決定されることが多い。言語情報処理にあっても同様であって、いっそう依拠するところが大きいと思われる（たとえば、はじめにも述べたように、多義語の意味はほとんど文

注 このあたりは、さらに詳しく考えを述べてみたいと思うが、今その余裕がない。全くの筆者のための参考文献をあげるならば、上引の諸論文のほかに

橋本進吉『国文法体系論』橋本進吉博士著作集七 1959

時枝誠記『国語学原論』1941

Ф. Ф. Фортунатов : Сравнительное языковедение, избранные труды т. I. 1956
中の словосочетания и их части.

N. Chomsky : Syntactic structures. 1957 勇康雄訳『文法の構造』ほか。

P. L. Garvin : Natural language and the computer, 1963

D. G. Hays : Readings in automatic language data processing, 1966

Академия наук СССР : Грамматика русского языка II 卷 (1954) 中のピノグラードフの分

Н. Н. Прокопович : Словосочетание в современном русском литературном языке 1966

Ch. Bally : Linguistique générale et linguistique française 3版. 1950

南不二男「述語文の構造」『国語研究』1965

脈で決定できる。このようなばあいの「文脈」とは、そこにさまざまな内容をもったものであると考えなければならない。大きなものとする、話手と聞き手のこと、文章の種類、文献の分野などがあるが、小さいものもある（たとえばその単語を含むワン・センテンス）。そして最も小さいものは、上述の連語であるとみることができる。さらにこの論文では文脈による分類語彙表の作成についてもふれたが、このような点にも、連語研究の必要性がみられる。

連語は二つ以上の自立語が関係をもっているものである。いま二つのばあい限定して考えてみることにすると、この関係それ自体にはどのような類型があるだろうか。これには多様な分類が可能であろう。自立語の品詞によって分けることもできる。助詞をとるかとらないかで分けることもできる。助詞については、その格関係、接続関係(接続助詞のばあいの格)などを注目することもできよう。しかしもう少し大きな分かれ目を見つけようとする、たとえば従属と並立とに分けるのも一つの方法である。^注このように分けたとき、この論文で扱った、助詞「や」で結ばれたばあいは、並列のなかに入れることができる。この論文では、依存関係についてはまだ取りあげていないのである(ただし「資金の内容」のような例を扱うばあいには、それを考えてはみた)。そしてこの依存関係のばあいには、二つの語が連なることによって、その意味がばらばらに存在するのではなく、意味としても互に結びあって、大きくまとまってゆく傾向があることを見たのである。(というの実はひとつの見方に立ったものであって、逆な見方も存在しうる。しかし逆な見方をとって全体が互に密接な関係で結ばれていることは否定できない。実はこの論文の Cd のような考え方とこの報告 165 ページ注の考え方の間には矛盾を含むおそれのある部分がある。この点については将来考え直したい。)この論文のような考え方をするとき、次には、この種の依存関係について考えてゆかなければならない。そのようなばあいには、その意味の結びあい方、連語の意味をどのようにとらえるかをさらにくわしくしてゆき、

注 例がやや特殊であるが、たとえば *Les langues du monde* CNRS, Paris, 1952 の 1179 ページ。パイイに従えば *coordination* は *syntagme* を形成しないという。パイイ、上掲 103 ページ。筆者は、学校文法の文節の諸関係のうち、対等の関係の特殊性についてふれたことがある。この報告 165 ページ注。

連語全体の意味と、連語を構成する各要素の意味とその間の関係をくわしく見てゆかなければならない。

そしてさらに、このような語連続の種々の関係のなかにあってもパイイのいう thème—propos の結合形式、AZ の形の syntagme^注 にあたるものについては、特にこれをぬき出し、これを分類しておくことが有益ではないかと思う(その分類基準は、判断の種類である)。なぜなら、その文において何が言われているかを、機械が「理解」するための、枢要部分をなすものであるからである。

注 パイイ、前掲、103ページ

〔付記〕 この論文を脱稿した後、校正までの間に次の論文を見る機会を得た。
Tzvetan Todorov : Recherches Sémantiques. LANGAGE mars 1, 1966
Current Trends in Linguistics 3, 1966 (U. Weinreich の項)

これらは本稿 Cd で考えたことと類似の点があるが、その発想には異なる面がある。